

今 NHK の大河ドラマは『花燃ゆ』ですね。幕末に登場した儒学者吉田松陰。彼の私塾で学んだ若者たちが、後の維新回天で大変な役割を果たして行く。私は日本史の中で、幕末から維新が 1 番好きなので見るのですが、残念な事に視聴率絶不調。「これから面白くなるのかな」と期待して見たいと思っています。

幕末はいつ始まったかという、1853 年のペリー黒船来航です。

「開国したくないよ。いやでござんす（1853）ペリーさん。」これを巡って、幕府が大きく揺れて行く。ペリーの黒船が来た時、勝海舟 30 歳・西郷隆盛 26 歳・吉田松陰 24 歳・坂本龍馬 18 歳・高杉晋作 14 歳・新島襄 10 歳。10 歳というと今の小学 4 年生。14 歳は中学 1-2 年。それが、「このままだったら、日本は列強に呑み込まれてしまうぞ!」と、夜も眠れないくらいに、ノイローゼになるくらい心悩ませて、「私は今、日本のために何ができるか」と悩んだ。これが江戸末期。

今の中学生・高校生で、日本の天下国家の事を考える人はいるのか? いるんです。この集会に、時々中学生も来るんですよ。今日は来てないけど。

この幕末の時、日本はものすごい危機です。というのは、徳川方に付いて「これからも旧体制でやって行く」と言うグループと、「尊王攘夷だ」と言うグループに真っ二つに分かれて、日本国民同士が殺し合い。日本国という概念がまだないんですね。当時は藩が世界です。所属している藩が国で、日本国全体を捉えるという概念が中々ない。

でも、日本の国内で仲違いしたら誰が得しますか? 欧米列強ですよ。幕府方にはフランス、薩長にはイギリスが付いて、互いに武器を供給しながら、日本が仲間割れして衰弱して行って、そして清国みたいにガブリ!という。

そうならないように、仲間割れしそうな日本の国内を、陰の世界で調停していた人がいるんです。清水次郎長（しみずの じろちょう/1820-1893:文政 3-明治 26）ですよ。彼は、西は滋賀県から東は東京・江戸まで、自分の子分たちを張り巡らして、徳川方とも薩長の子孫たちとも、とにかく仲良くするようにありとあらゆる手を使いました。

彼を最大限に利用したのが勝海舟（1823-1899:文政 6-明治 32）。彼は最後クリスチャンになりますよ。勝は清水次郎長に会いに行きました。清水港（しみずみなと）。ちょっと挑戦的な事を聞きます。「次郎長親分。子分の中で、アンタのために命を捨てる子分、何人いる?」そしたら、「あっしのために命を投げってくれる子分なんか、1 人もいません。」「えっ」と勝海舟が驚いていると、「でもね、私は子分のために死ぬ覚悟は、いつでもできてます。」それを聞いて、「これか! 次郎長一家の結束の固さはこれか!」と感心した。という事が、『氷川清話（ひかわせいわ）』という、べらんめえ調の勝海舟の本の中に出て来ます。

人間を動かすために、よく「アメとムチ」と言いますね。アメとは報酬で人を動かす事。高い給料を払うから働いてくれ。ムチで動かすのはイスラム国。従わなかったら処刑。恐怖でコントロールする。アメとムチを使い分ける。

だけど、もう 1 つの道がありますよね。それは、愛による感動です。感動して、「やりたい」と思った時の働きは創造性がある。勢いがある。人間は、自分のために一肌脱いでくれる人のために、一肌も二肌も

脱ぎたくなるんじゃないですか？ 次郎長の子分たちが親分のために一肌も二肌も脱ごうとしたのは、誰よりもそうしているのが親分だから。

今、この木曜日の集会では『使徒の働きシリーズ』

「初代教会のクリスチャンたちが、患難をものとししないで、異文化の国々に福音を携えて宣べ伝えて行く」という記録を見えています。行ったら、迫害・弾圧・暴力、ありとあらゆる事を受ける。にも拘らず、初代教会のクリスチャンが前進して行ったのはなぜか？ 何が彼らを駆り立てていたのか？

それはやっぱり、キリストから流れて来る愛に応えたいという欲求です。この世界をお造りになった方は私を愛して下さった。私の罪のために救い主を送って、この方に身代わりの刑罰を受けさせて下さった。そして、よみがえった方はいつも私と共におられる。だから、「この滅茶苦茶な世界に、神の究極の理想世界をもたらす」という人類完全復興救済プラン、人間として1番やり甲斐のある仕事に私も参加する。これが、初代教会のクリスチャンを駆り立てて、立ち上がらせて行ったのではないかと思います。そこで今日は、**使徒の働き 14章**から一緒に考えたいと思います。（*聖書は新改訳第3版）

ここは、パウロとバルナバという2人のクリスチャンが世界伝道旅行に出ている記録で、今日読むところはルステラという場所での事件です。ルステラは今のアナトリア半島・トルコの中央部辺り。ここで、たくさんの方が救われてクリスチャンになりますが、それは後の章を読むと分かる事で、ルステラにいる時はその事を書かない。ある事件にスポットを当てて、「この事件をよく考えましょう」と作者が促すように示している箇所です。

使徒の働き 14:8-15 ルステラでのことであるが、ある足のきかない人がすわっていた。

彼は生まれつき足のなえた人で、歩いたことがなかった。この人がパウロの話すことに耳を傾けていた。パウロは彼に目を留め、いやされる信仰があるのを見て、大声で、「自分の足で、まっすぐに立ちなさい」と言った。すると彼は飛び上がって、歩き出した。

パウロのしたことを見た群衆は、声を張り上げ、ルカオニヤ語で、「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ」と言った。

そして、バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。すると、町の門の前にあるゼウス神殿の祭司は、雄牛数頭と花飾りを門の前に携えて来て、群衆といっしょに、いけにえをささげようとした。

これを聞いた使徒たち、バルナバとパウロは、衣を裂いて、群衆の中に駆け込み、叫びながら、言った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」

パウロがキリストの福音メッセージを語ったのですが、今まで聞いた事がない話なので、多くの人たちが集まって、その中に、生まれながら足のきかない人がいました。パウロには、この人の中にキリストを信じるという様子が分かったんです。そこで、「まっすぐに立ちなさい」と言ったら、今まで1度も歩いた事がなかったのに、飛び上がって歩き出した。それを見てみんなビックリして、「神々が人間の姿をとって、私たちのところにお下りになったのだ。この世界に來られたのだ。」と言った。

今日は、この箇所から3つのポイントで語りたいと思います。とても大事な事です。今の日本を考える時にも、非常にヒントになります。

1) 真理の理解を阻む理由は土着化発想

ここで、パウロとバルナバが強力なメッセージを語りました。「この世界をお造りになった神がおられます。その神のひとり子が救い主となって、この世界に来て下さいました。」しかも奇跡が伴ったので、見ていた人は皆びっくりしたけど、彼らはそれを聞いた時、独特の理解をしましたね。

使徒の働き 14:12 **バルナバをゼウスと呼び、パウロがおもに話す人であったので、パウロをヘルメスと呼んだ。**

ゼウスは、ギリシア神話に出て来るオリンポスの神々のナンバーワンです。ラテン語ではジュピター。ゼウスの息子がヘルメス。ヘルペスではない。ヘルメスはゼウスのスポークスマン。だから、雄弁の神。ヘルメスは今、エルメスというブランドになってますね。靴・ブーツ・時計など。身に着けてないと思いますよ。エルメスの時計 40 万円。皆さん、そんなの全然関心がない。関心があっても買えない。

ルステラ地方には何百年も前から、ある神話・伝説が残っていました。「昔ゼウスとヘルメスが人間の姿をとって、ルステラにやって来た。その時、お百姓さんのピレモンという夫婦が、彼らを神々だと知らずに一生懸命もてなした。そしたら、実は神々だという事が分かって、夫婦はすごく良くしてもらった。」

今まで見た事がないでたちで、聞いた事がない話をし、生まれつき歩いた事がない人が言葉だけで飛び跳ねて歩いている。こんなの経験した事がない。「これ、神が人間になったんちゃう?!」キリストの福音とギリシア神話を、瞬時に融合させたんです。これを土着化と言います。

なぜこんな事をしたかという、もちろん昔から神話があったというのがあります。でも、余りにも強力な、今まで聞いた事もない外来からの真理が入って来た時、それまで伝統的に伝え聞いて来たものを捨てずにどうするかという、融合させる。つまり、「この新しい聖書メッセージは、我々が昔から信じて来たものの一部なんだ。」土着化して受け入れる事によって、今までの伝統を捨てなくてもいい。文化の衝突を起こさずに、新しいものを受け入れる事ができるという手段。これは世界中にあります。これをすると、真理が分からなくなるんです。

日本も一緒ですよ。神道。神道って、何か分かりますか? ご近所にも〇〇神社、あるでしょ。私も小さい時、お祭り楽しみやった。今でもアセチレンの臭い嗅いだら、胸がきゅんとする。

神道には經典がないんです。私たちには聖書という神の言葉がある。仏教にも仏典がある。古事記と日本書紀はあるけど、あれは經典じゃない。「誰々が、何々して、こうした」という事が書いてあるだけ。

「神道を信じる者はこうなさい。こうしてはならない。このように生きなさい」というような事は、その中には書いてません。古事記を読んだ方は分かると思いますが全文漢字。すごく長い名前。分かり易くしても分かりにくい。物語だけど教理がない。經典がない。教えがない。教義がない。

後から日本に入って来たのが仏教です。仏教には仏典・お経という經典・教理があります。教理がしっかり・くっきり・はっきりしている。教理がしっかりある仏教が入って来たら、神道はひとたまりもない。完全に消し飛びます。しかし、神道には1つ大きな役割がありました。天皇家及び豪族たちの権威付け。自分たちの権威を支えている神学的な、しかし教理はない神道が、新しく入って来た仏教によって消し飛ぶのはまずい。で、どうしたかという、こう考えた。「神道に登場する様々な神々は、大乘仏教に登場する様々な仏さんが、姿を変えて現れていたものだ。」これを翻字垂迹説(ほんじすいじゃくせつ)と言います。

例えば伊勢神宮。パワースポットって、なにがやねん。ここには天照大神(あまてらすおおみかみ)が祀ら

れています。しかし、同時にお寺もあるんです。大日如来慶光院（だいにちによらい けいこういん）。大日如来を仏さんとして拝んでいる。つまり翻字（元の国という意味）、元の国にいた大日如来が、日本に来て現れたものが天照大神。「大日如来という宇宙全体を表すイメージの仏は、天照大神と同一のもの」という考えが翻字垂迹説。

僕は高校の時、アルバイトで的屋（テキヤ）をやっていました。八坂神社で。もう、お客さんが大変。大きな氷をコカ・コーラ（当時は瓶ですよ）でギュッと押さえたら、びんの形にへこむ。それをグルグル回しながら冷やして。懐かしい。私の青春。

八坂神社という名前が付いているけどお寺です。神社ではない。お寺。祀り神はスサノオノミコトですが、仏教的には牛頭天皇（ごずてんのう）という事になっている。

今まで神道で紹介されて来た八百万の神々が、新しく登場した仏教によって一掃されてしまうのを避けるために、「実は、元々同じものでした。」こうすると、文化的に衝突がないでしょ。円満に行く。だけどこれは、本当に仏教を知った事にならない。本物の仏教とぶつかった事にはならない。なぜなら、自分たちが受け入れ易いように、対象を改造して受け入れているからです。

翻字垂迹説みたいなものが 10 世紀から 12 世紀にかけてウワツと広がって、日本だけではなく世界中で同じようなものがあります。カトリックもそうですね。女神信仰がある所は、マリア様はその姿となって現れたという事。本当の福音と衝突した事にはならないんです。

土着化という発想は、一見丸く収まるように見えて、真理を知る事ができなくなります。そして、「元々全部一つでいいじゃない」という土着化の理論は、やがて世界統一宗教に適応されると思います。聖書預言では、「世の終わりには、色んな宗教が、バビロン宗教という一つの大きな世界宗教にまとめられる」と書いてあるのですが、その時の神学体系はこれですよ。多分。「色んな宗教があるけど、元々一つだったんだ。現れが違っただけだ」という論理でやって行くんじゃないか。

真理の理解を阻む理由の 1 つは土着化発想にある。それが既に**使徒の働き**に出て来ているんです。

「彼らは福音の人たちじゃない。ギリシア神話の人たちだ」という事で受け入れ易い。しかしパウロたちは、「やめて下さい！ なぜこんなバカな事をするんですか！」と否定します。当然の事ですが否定する。

2) 偶像礼拝の本質はむなし。なぜなら偶像はフィクションだから。

使徒の働き 14:15 「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしのことを捨てて、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」

あなたがたがこのようなむなしのことを捨てて、福音を信じるように来たのです。

むなしなことという言葉に*が付いてますね。欄外を見ると「すなわち、偶像崇拜」。むなしことと偶像崇拜は同じ言葉です。偶像を拝む事はむなし事。フィクション（虚構・創作・作り話）を拝んでいるにすぎないから。でも、作り話も長い時間を経て行くと伝統という鎧を身に着けるので、何かあるかなと思うのですが、「元を辿ると、がらんどうだ」と言っているのですね。

これ、言おうかどうか迷ったのですが。これから私が言う事は、私が言ったものではありません。私が尊敬しているある作家が言っている事です。大阪が生んだ日本史の分析理解の天才。作家というより、もう歴史学者と言ってもいい。大阪が生んだ歴史小説の大家と言え、あの人しかいない。

司馬遼太郎（しば りょうたろう/1923-1996:T12-H8）です。

私 1 回だけ、司馬遼太郎を生身で見た事があるんですよ。東大阪のある商店街を友達と歩いていたら、彼が前から歩いて来たんです。お豆腐買いに。見た瞬間、何か、ゲゲゲの鬼太郎を思い出したんです。髪型が似てる…。私、司馬さんの大ファン。特に『龍馬がゆく』『坂の上の雲』『功名が辻』色々ありますが。余りにもファンだったので、私らしくもなく、声かけられなかった。

この方が東北大学医学部で講演した講演録『心と形』、知る人ぞ知る名講演です。

なぜ東北大学医学部で講演したかという、日本は先進国の中で、不思議に臓器移植のドナーが非常に少ないんです。色んな先進国では、脳死状態になったら、「使える臓器を使って下さい」とドナー登録が進んでいるし、ある意味、登録しない人の方が少ない。ところが、日本はドナー登録しないし、臓器を人にあげるという事に対して、精神的にブレーキがかかっているのはなぜなのか？ それはもしかしたら、日本の仏教的な風土観が、それをさせないようにしているんじゃないだろうか？

例えば、亡くなった方をお部屋に安置する時、「仏さん、どこに安置した？」と言うでしょ。その体を拝むじゃないですか。ご遺体を拝む事に、何の違和感もないですね、日本人は。火葬にして遺骨になると、その遺骨も拝むでしょ。何か霊験あらたかなものが体にあるかのように、仏のように考えているので、ましてや脳死で、まだ心臓が動いている状態の時に臓器をあげるというのは駄目だ、というタブー観。それは、仏教の人生観から出て来たものではないだろうか？

それを踏まえて、仏教が本当に教えているものは何か、分かり易く話しているんです。彼は中立の立場で、色々見ながら説明しているのですが、まあ賢い。彼の頭、CD-ROMにできなかつたかなと思いますよ。彼の頭を私の頭に入れたら、私の話、全然違うんじゃないか。もう亡くなられましたね。

何度も言いますが、私じゃなくて彼が言っている事です。「仏教とは、釈迦族のゴータマ・シッダールタという人が教えた一つの哲学である」。仏教をひと言で言うと、全ては無。全ては空（くう）。数字で表すとゼロ。今あると思っているものは、やがて無くなる。今無いものは生れて来る。しかし生まれて来ても、また無くなって行く。結局、全ては無に帰す。ゼロ。全ては無から出て無に返り、空から出て空に戻る。ゼロ。だから、仏教は無神論です。ゼロだから神も無い。

そして靈魂もありません。仏教では霊・魂の存在はないと教えています。本来の仏教では、靈魂の存在は否定されているのです。だからタタリもありません。死んだ後に極楽地獄の裁きもない。本来の仏教ではそんなんです。

450 年くらい前の織田信長全盛時代、信長 34 歳で京都に入りました。それからしばらく、爆発的に広がるのがキリシタン信仰です。信長が京都で自分の権力を確立するまでは、歴代の為政者たちはキリシタンが大嫌いでした。キリシタンとは、ポルトガル語でクリスチャンの事です。以前は、「キリシタンという外来のものは駄目だ。そんなものは要らん」と否定する人が多かったのですが、信長はキリシタン、バテレン（宣教師）に対して好意的でした。

ある時、「俺の前で宗論（しゅうろん）やれ。」宗論とはディベート。キリシタン側からルイス・フロイス（1532-1597）という知識人。日本語ができる。ザビエルの 2 代目。そして、ロレンソ了斎（りょうさい/1526-1592）。日本人。片目がなくて、もう片方も殆ど見えない。片足が動かなくて杖ついて。体が不自由で、琵琶法師として全国周遊の旅をしていたのですが、山口にいた時に、ザビエルのメッセージを聞いてキリシタンになりました。

了齋が、日乗（にちじょう/生年不詳-1577）という比叡山のお坊さんとディベートします。
比叡山は天台宗の総本山で、天台宗が日本仏教の元祖。真言宗は密教で、普通の仏教ではありません。
禅宗・浄土宗・浄土真宗、全部、天台宗から出て来る。天台宗の最高峰・天台宗の東大、それが比叡山。
そこで心海（しんかい）という上人（しょうにん）から学びました。

当時の知性と知性がぶつかった。どんな事が交わされたか、ルイス・フロイスの『日本史』を読むと、非常に面白いですよ。日乗が聞きます。「デウス（*キリシタンの神）はどんな色・形をしているのか？」
—「神は靈的存在だから目で見える事はできない。目で見える事は全部有限だ。神は無限の方だから目で見える事はできない。」

「目で見えないものをどうして信じるのか？ 信じる根拠は何か？」—「今ポルトガルから宣教師たちが色々な文明の利器や芸術品を持って来て、日本人はビックリしている。作者はポルトガルにいるから、日本人は作者を見る事はできない。しかし、作品や芸術品を見る事によって、作者の知性の素晴らしさが分かる。同じように、自然界を見ると、何と素晴らしくでき上がっている事か。すなわち、世界をお造りになった知性、鋭く大いなる存在がいると分かるのではないか。」

私と同じやなど。今クリスチャンが語っている事と同じ事を言っている。もう少し、こぶし聞かせて言っ
たみたい。琵琶法師だから。

その時、織田信長が口をはさみました。「デウスは、善悪に対してほうびや罰を与えるのか？」
了齋が「お方様。その通りでございます。創造主なる神様は、その人が生きている間とは限りませんが、善に報い、悪に罰を下されます。全ての人は神の前に立って、言い開きをしなければなりません。」
すると日乗が「あっはっは」と笑って、「という事は、目に見えない神がいると信じているだけでなく、体の中に靈魂が存在するという事を信じているのか？ バカバカしい！」

ルイス・フロイスが、「あなたは何度説明しても分からないのですね。」その時ブチッと切れるんです。
「何だ！ その無礼な言い様は！」ルイスの胸ぐらを掴んで、「減らず口を叩いているおまえの、この弟子を叩き切って、こいつの体から出て来る靈魂を見せてもらおうか！」信長の愛刀を勝手に鞘から抜いて切りかかろうとしたのを、信長がガッと抑える。その様子を300人の武将たちがずっと見ていました。

何が言いたいかという、450年前のお坊さんである日乗さんは、非常に正確に仏教を理解しているという事です。仏教では靈魂は存在しないと教えているから、この点でディベートしているわけ。
だけど、全て無というのは、すごく切ない哲学じゃない？ 宇宙に対してクールすぎるほどの客観的態度ですよね。私が死んでも宇宙は何も変わらないというわけ。私が死んだ後に出て来る人もやがて死にますが、宇宙は何事もないように運行を続けます。無。宇宙に対するクールすぎる客観的態度を主観的態度として身につけた時、悟りと言うんです。「悟りを開いた者」とは「仏」という意味です。

普通の人は、これ、耐えられないんじゃないですか？ 自分が無だと思ったら、無いものは無いと言うわけですよ。どう言ったらいいかな…。

例えば、片頭痛持ちの人は辛いですね。何で頭痛があるの？ 頭があるから。頭がなかったら頭痛はない。膝が痛いのは膝があるから。膝を切り落としたら、膝痛なくなる。極論言ったらそういう事。
なぜ悩むの？ 悩んでいる自分があるから。悩んでいる主体者の私が無ならば、悩みがあったとしても感じないのだから解決でしょ。というわけ。

これで、「そうか」と思える人は何百万人に1人ですよ。こんな透徹した徹底的な客観思考の哲学。普通の人は死が怖いし、命が愛おしいし、病気が治りたいし、ごはん食べたいし、誰かに救ってほしいんじゃないですか？誰かに救ってほしい「救い」という欲求と、全ては空である「空」の仏教思想を、合理的に一つにまとめた天才が親鸞（しんらん/1173-1263）です。重ねて申し上げます。私ではなく司馬遼太郎さんが仰っているのです。

司馬さんは、無人島に1冊だけ持って行くなら『歎異抄（たんにしょう）』だと言っています。戦時中、彼に召集令状が来ました。配属されたのは、最も戦死率が高い戦車部隊。日本の戦車はベコベコ。鉄の棺桶。「こんなところおったら俺は死ぬ。死んだらどうなるか。」悩んで悩んで、『歎異抄』を本屋で見つけて読んだ時、親鸞に騙されてみようと思った。「肌身離さず持っていた」と、ある所で言っています。

親鸞に高い評価をしているのが司馬遼太郎。その彼が言っている事です。仏教には自力宗（じりきしゅう）と他力宗（たりにきしゅう）があります。他力宗の最大が浄土真宗で、浄土真宗は日本最大の仏教教団。もちろん霊魂はない。全ては空。同時に阿弥陀如来（あみだによらい）信仰があって、「善人も悪人も等しく分け隔てなく、阿弥陀如来様が救って下さる。」これを、弥陀の本願（みだのほんがん）と言います。

親鸞は、「何か偉大なものに救ってほしい」という欲求と、「全ては空・ゼロ・自分の存在もあると思っただけで無いのだ」という思想を肯定した状態で、救いの欲求を満たす大発明をしました。空に別名を付けたんです。それが阿弥陀如来。阿弥陀如来とは空。「善人も悪人も等しく分け隔てなく、阿弥陀如来様が救って下さる」というのは、「善人も悪人も最後は死んで無になる。死の前では平等だ」という事を言い換えているのです。と、私ではなく、司馬遼太郎さんが言っている。日本人が一生懸命拝んでいる阿弥陀如来はゼロなんです。

偶像はフィクションです。フィクションは、現実の私を救う事はできません。でも、みんなできていると、何かがあるかのように思えて来ます。神輿（みこし）の中に何が入っていますか？何も入ってない。だけど、皆で汗水たらして担いでいたら、何かがあるかのように思うんじゃない？その「かのように」というのをフィクション・創作と言います。それは、現に存在している私を救う事はできません。

1つ目のポイントは、真理の理解を阻む理由は土着化発想。2つ目のポイントは、偶像礼拝の本質はむなし。なぜなら偶像はフィクションだから。

3) 福音とは何か

使徒の働き 14:15 あなたがたがこのようなむなしことを捨てて、天と地と海とそこにあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。「生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」とパウロは言いました。

使徒の働き 14:17 とはいえ、ご自身のことをあかししないでおられたのではありません。すなわち、恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びとで、あなたがたの心を満たしてくださったのです。

私たちが食べたり、人生を喜びを持って生きて行けるのは、実りの季節があるからです。実りがあるのは雨が降るからです。恵みをもって、天から雨を降らせている方・私たちを生かして下さっている方、生ける神。これが、過ぎ去った時代の神様の啓示でした。

しかし、福音というのは、もっともっとはっきりと神様の愛が分かる啓示です。それは、天から雨が降るといふ啓示ではなく、天から人となって、この世界に来て下さったイエス・キリストを通して示される神様の啓示。この方は生身の人間となって、この世に来て下さいました。

若さを考えた時、若さの特徴は何だと思えますか？ ある方は、ドーパミンの量だと。ドーパミンが出るとやる気が出る。やる気ホルモン。ワクワク・ドキドキ・ウキウキするのが嬉しい。それが若者。若さ。段々疲れて来るとワクワクするの、しんどない？ ワクワクするより、「ちょっと寝かして」みたいな。枯れとる、それは。

本田宗一郎（ほんだ そういちろう/1906-1991:M39-H3）さんによると、若さとは過去のしがらみがない事。だから研究班には、いつも若者を入れたそうです。素っ頓狂な、でも新しい発想は若者が持って来る。過去のしがらみがないから。

ある作家は、今まで 131 冊の本を書いています。これはすごいよ。書いてみたら分かりますが、本は大変。誤字脱字がないように目を皿のようにして。あるもんね。

彼が言っています。「1 冊目と 131 冊目を比べたらどちらがいいか。これを決めるのは難しい。131 冊目の方が、若い時の作品よりも知識はあるし、小説としての構成もきっちりしているし、経験も積んでいるから、文章から滲み出て来る深みもあって、表現方法も豊かだ。駆け出しの頃の 1 冊目より 131 冊目の方が、そういう意味では優れている。」

「だが、131 冊目がないものが 1 冊目にある。若い時にしか書けない何かがある。それを敢えて言うなら“勢い”だ。1 冊目は独善・断言的・言い切り・独りよがり・生意気。でも、怖いもの知らずだから勢いがある。経験を積むと、『そんなん書いたら青臭いと思われる』とか『こんな事、今頃書いてどう思われるか。』色んな知識や世間体や経験が、却って邪魔になって、思い切り良く書けない。だから、どこかでブレーキがかかっている。1 冊目は、車で言うとアクセルしかない。」

勢いで出たとこ勝負。50 代でこんな事やってる人がいますけど。「危ないぞ、おまえ」みたいな。

なぜこれを言うかという、私はこれを経験したんです。10 年くらい前、関東のある避暑地で泊りがけの聖書のセミナーがあって、全部終わってから、1 人の青年のお見舞いに行く事になりました。彼は白血病で、もう助からない。「是非お見舞いに行ってください」と頼まれたんです。それを若者グループが聞きつけました。「僕も連れて行って下さい。」「君だけやぞ。言うたらあかんぞ。」言っちゃうのよ、これが。それで 4 人くらい。どうしようか迷いました。

彼らと一緒に 1 週間生活して、ノリが良くて明るくて、楽しくて元気が良くて、音楽が好き。だけど軽いです。どこまで冗談で、どこまで真剣で、どこからふざけてて、どこから本気なのか、よく分からない。ずっと一緒にいるとしんどい。そんな若者たち。無下に断るのも可哀想かなと思って、「連れて行くけど大人しくしてね。病院だから。1 曲ゴスペルを賛美してくれるのが条件だ。」

青年は、薬の副作用で髪の毛が全部抜けてて、痩せこけてて。私は単刀直入、イエス・キリストの福音を伝えました。「キリストは、あなたの罪のために十字架で死んで下さった。そして、あなたの死の問題を解決するためによみがえって下さった。あなたに必要なものは全部終わっている。全部完成している。あなたがキリストを救い主と信じたら救われる。」

そして、若者たちにゴスペルをお願いしました。1 番はかろうじて歌えたんですが、2 番に入った時、ポ

一カルの子が、余りにも痩せこけている同世代の若者を見て胸が締め付けられて、途中で歌えなくなっ
たんです。嗚咽して。ボーカルが嗚咽したら曲にならない。泣いているのを見て、私は「使えんヤツやな。
歌詞に意味があるから歌ってと言っているのに、なんで歌えんかな」と心の中で裁いていたのですが、青
年が私の袖を引っ張って、こう言ったんです。

「高原さん。今まで色々な人がお見舞いに来てくれたけど、僕のために歌えなくなるほど泣いてくれた
のは、この人たちだけです。なぜ、この人たちは僕の将来の事を心配するんでしょう。本当に、天国と地
獄があるからじゃないでしょうか。僕はその世界を見た事がないけど、彼らの真剣さで、そういうものが
あるんじゃないかなって、心から思えるようになっていっています。僕のために祈って下さい。」
そして、「キリストを信じます」という祈りが出て来たんですね。

その時、本当に悔い改めました。「なんで歌われへんのか!」と思った自分が、すごく浅はかだった気がし
ましたね…。

泣いて、苦しんで、歌って、祈ってというのが青年の胸を打ったんですが、イエス・キリストは、阿弥陀
如来のように観念上の存在ではなく、生身の人となって、この世界にお生まれになった方です。
神であられるのに、神のあり方を捨てられないとは考えないで、人としてこの世界に生き、十字架の死に
至るまでまっすぐに歩み、私たちの罪の身代わりに死んで下さった方です。

「昔々ある所に…」という話ではない。歴史上、本当に現れて下さった方。本当に十字架の上で死に、本
当に3日目によみがえり、本当に天に帰り、皆さんの救いを完成した方です。

皆さん。このキリストを受け入れるなら救われます。
土着でもなく、むなしのものにすぎるのでもなく、是非このキリストを信じて下さい。
そして、本物の救いをご自分のものになさって下さい。心からお勧めしたいと思います。

* 動画は YouTube で「HCA 東住吉キリスト集会」検索。ぜひ観て下さい。

* ラジオ番組「聖書と福音」(15分)も是非どうぞ。スマホでいつでも聞けます。YouTube もあります。

動画筆記 : Rumi